

墨子非樂篇補正

原 孝 治

非樂篇

非樂上篇 仁人之事者、必務求興天下之利、除天下之害、

「務求」は連文。呂氏春秋孝行云、務其本也。高注云、務猶求也。

非樂上篇 且夫仁者之爲天下度也、非爲其耳之所樂、目之所美、口之所甘、身^③之所安。

① 「且夫」は連文。夫猶且也。古大夫・且・而三字互通用也（經詞衍釋卷十）。且猶夫也。提示之詞也（古書虛字集釋卷八）。

② 「耳之所樂、目之所美」は、本「目之所美、耳之所樂」に作る。下文には、耳・目・口・身の順に述べ、それに対応して身・口・目・耳とすれば、下文の前提となる此處は、耳・目・口の順にすべし。

③ 耳・目・口は皆四字句、又下文には「身知其安也」に作れば、身以下も亦四字句にすべし。體字を削る。

非樂上篇 是故子墨子之所以非樂者、非以大鍾・鳴鼓・琴瑟・竿笙之聲、以爲不樂也。

○「是故」はここでは上下の文を原因と結果として結合してはゐない。發端之詞也（古書虛字集釋卷九）。

非樂上篇 將必厚措斂乎萬民、以爲大鍾・鳴鼓・琴瑟・竿笙之聲。

○「將必」は連文。將猶必也（古書虛字集釋卷八）。又、經傳釋詞補に云ふ、將、詞也。或爲發語詞。必將云云、皆謂必云云也。將必は非樂上篇に四見す。（尙賢上篇の注參照）

非樂上篇 然則樂器反中民之利亦若此、即我弗敢非也。然則當用樂器、民有三患^{①②③}

①「然則當用樂器」の六字、吳氏墨子校注は曹校に依り上文の「譬之若聖王之爲舟車也云云」の上に移す。此處の文、「民有三患」にて始るは唐突。「然則當用樂器」の六字有るを承接に於て長ずとなす。今、釋史・畢沅本に従ふ。

②「則猶而也」（經傳釋詞卷八、古書虛字集釋卷八）。

③「當猶如也」（經傳釋詞卷六）。

非樂上篇 （是故子墨子曰、）姑嘗厚措斂乎萬民、以爲大鍾・鳴鼓・琴瑟・竿笙之聲、云云

○「厚措斂乎萬民、以爲大鍾・鳴鼓・琴瑟・竿笙之聲」は上に同文有り。又、上下の文は皆「是故子墨子曰、爲樂非也」を以て一節を結び、前に「是故子墨子曰云云」の文を置く事無ければ、此の「是故子墨子曰」は下文の「是故子墨子曰」に涉る衍文。

非樂上篇 今王公大人、惟母爲樂、虧奪民衣食之時、以拊樂如此多也。

○「時」は下文「財」に作る。今、「財」に改む。(財)

非樂上篇 「王公」大人鏞然奏而獨聽之、將何樂得焉哉。

○「鏞」字、王樹枏に従ひ「肅」に改む。王樹枏云、鏞當爲肅字之誤と。

非樂上篇 今王公大人、惟母爲樂、虧奪民(之)①衣食之財、以拊樂如此多也。

①「之」字、上下の文に無し。上文に云ふ、「惟母爲樂、虧奪民衣食之時」と、下文に去ふ、「惟母爲樂、虧奪民衣食之財」と。「之」字無し。據って「之」字を削る。

②「拊樂」は「樂器をたたく」事であらう。「爲樂」は「音樂をなす」↓「音樂を奏する」へと引伸するのであらう。

非樂上篇 (是)故子墨子曰、今王公大人、惟無爲樂、虧奪民衣食之財、以拊樂如此多也。

○上文には、「今王公大人、惟母爲樂、虧奪民(之)衣食之時、以拊樂如此多也。是故子墨子曰、爲樂非也」と(二見す)。此處と竝列。上文の二例は共に「今王公大人」の上に「是故子墨子曰」の六字無し。此の六字、下文の「是故子墨子曰、爲樂非也」に涉る衍文。牧野本に此の六字無し。牧野氏云ふ、舊本に無しと。

非樂上篇 (今之)禽獸・麋鹿・蜚鳥・貞蟲、因其羽毛以爲衣裳云云

「今之」は殆と意適合せざれば、恐らくは「之」は「人」の誤りにして、上文の「今人」に涉る衍文。「人」を「之」

に誤るの例、天志中篇の「是故子墨子之有天志辟之」(賈曆本)の「辟之」を諸本は「辟人」に作る。又、備突篇の「令之入門中」の「之」を畢沅は「後漢書引作人」とする。

非樂上篇 小人否、^以似^二伯黃徑。

○「似」字、牧野本は小川泰山の校に依り、「以」に改む。今之に従ふ。

非樂上篇 今天下士君子、請將欲求興天下之利、除天下之害、當在樂之爲物、將不可而不禁止也。

○「而」字、もと「禁」の下に有り。今、陶鴻慶の説に従ひ、「不可」の下に移す。陶氏云、「愚案、而字當在不可下。

本作將不可而不禁止也。不可而猶言不可以。屢見尙賢・非命篇。此亦其例也。上文云、寇亂盜賊并興、不可禁止也。亦以禁止連文」と。尙、禁、止也(廣雅釋詁三)。禁止は連文。

(非樂上篇終)

墨子非命篇補正

原 孝 治

非命篇

非命上篇 子墨子言曰、古者王公大人、爲政國家者、皆欲國家之富、人民之衆、刑政之治。然而不得富而得貧、不得衆而得寡、不得治而得亂、則是本失其所欲、得其所惡。是故何也。

〔子墨子言曰、古者王公大人……是故何也〕迄は、尙賢上篇の冒頭と略同じ。唯、尙賢上篇では「古者」を「今者」に、「爲政國家」を「爲政於國家」に、「是故何也」を「是其故何也」に作る。又、「是故何也」に對する墨子の言は現在の事であれば、牧野校に従ひ「古」字を「今」字に改む。

非命上篇 子墨子言曰、執有命(者)以禳於民間者衆。

○「者」字、牧野本は藤校に依つて削る。今之に従ふ。

非命上篇 命壽則壽、命夭則夭。^①命雖強勁何益哉。^②

①「命」…王念孫云、「此（命）下有脫文、不可考」と。「命」字疑ふらくは「力」字の誤り。陶鴻慶云、「疑本作力雖強勁。作命者涉上文而誤也。中篇云、天下皆曰其力也。下篇云、天下之治也、湯武之力也。又云、夫豈可以爲命哉。故以爲其力也。又云、亦豈以爲其命哉。又以爲力也。皆以力與命對文。此文若無力字、則意不明。列子力命篇、義與墨子相反、正主此說也」と。

②「勁」強也。故に強勁は連文。

非命上篇^(甲) 然而今天下之士君子、^(A)或以命爲有。蓋嘗尙觀於聖王之事。古者桀之所亂、湯受而治之、紂之所亂、武王受而治之。此世未易、民未渝、在於桀紂、則天下亂、在於湯武、則天下治。^(A)豈可謂有命哉。^(乙)然而今天下之士君子、^(B)或以命爲有。蓋嘗尙觀於先王之書。先王之書、⁽¹⁾所以出〔令〕國家、布施百姓者憲也。先王之憲亦嘗有曰「福不可請、而禍不可諱、敬無益、暴無傷者乎。所以聽獄制罪者刑也。先王之刑亦嘗有曰「福不可請、〔而〕禍不可諱、敬無益、暴無傷者乎。所以整設師旅、進退師徒者誓也。先王之誓亦嘗有曰「福不可請、〔而〕禍不可諱、敬無益、暴無傷者乎。〔B〕豈可謂有命哉。」

①「出」字の下、陶鴻慶の校に據り「令」字を補ふ。陶云、「出下當有令字。出令國家、猶上言爲政國家也。下文云、是故古之聖王、發憲出令、是其證」と。

②「先王之憲云々」、「先王之刑云々」、「先王之誓云々」の三條は相竝ぶ。故に、「先王之憲云々」の條に従ひ、「先王之刑云々」、「先王之誓云々」の條の「禍」の上に「而」字を補ふ。

③ 上文甲の「然而今天下之士君子、或以命爲有。蓋嘗尙觀於聖王之事。」より「豈可謂有命哉」迄と、乙の「然而今天下之士君子、或以命爲有。蓋嘗尙觀於先王之書。」以下とは有命論に對する反論として相竝ぶ。上文甲は「聖王之事」

に、(乙)は「先王之書」に照し觀る也。そして、上文(甲)の(A)「或以命爲有」と「豈可謂有命哉」とは呼應すれば、(乙)の(B)「或以命爲有」に應ずるものとして、「暴無傷者乎」の下に「豈可謂有命哉」の六字を補ふ。

非命上篇 然則所爲欲義人在上者、何也。

○爲猶以也(古書虛字集釋卷二)。故に、所爲猶所以也。

非命上篇 義人在上、天下必治、上帝山川鬼神必有、幹主・萬民被其大利。

○「有」字…于鬯云、有當讀爲右、即佑字也。上帝山川鬼神必佑截句。與上句天下必治句法同例。幹主二字當屬萬民被其大利爲句。幹主與萬民並稱、則必不指天下之主。蓋幹主者、諸侯之謂也。

非命上篇 子墨子曰、^(甲)古者湯封於亳。絕長繼短、⁽¹⁾方地百里、與其百姓、兼相愛、交相利、移則分。率其百姓、以上尊天事鬼。⁽⁷⁾是以近者安其政、遠者歸其德。聞湯者、皆起而趨之、罷不肖・股肱不利者、處而願之曰、奈何乎、使湯之地及我吾、則吾(利)豈不亦猶湯之民也哉。是以天鬼富之、諸侯與之、百姓親之、賢士歸之。未歿其世、而王天下、政諸侯。^(乙)昔者文王封於岐周。絕長繼短、⁽¹⁾方地百里。與其百姓、兼相愛、交相利、⁽¹⁾則(分)。⁽²⁾率其百姓、以上尊天事鬼。是以近者安其政、遠者歸其德。聞文王者、皆起而趨之、罷不肖・股肱不利者、處而願之曰、奈何乎、使文王之⁽³⁾地及我吾、⁽⁴⁾則吾(利)豈不亦猶文王之民也哉。是以天鬼富之、諸侯與之、百姓親之、賢士歸之。未歿其世、而王天下、⁽⁵⁾政諸侯。

(甲)の「古者湯封於亳」王天下、政諸侯」と下文(乙)の「昔者文王封於岐周」王天下、政諸侯」とは相對する。(甲)の

「古者湯封於亳」が(乙)では「昔者文王封於岐周」となっているが、「絕長繼短く交相利」と下文の「是以天鬼富之」王天下、政諸侯」の部分、即ち、冒頭と結尾は(甲)(乙)が完全に一致する。「墨子」の論述構成から見ると、本は(甲)(乙)が完全なる對であったと考へられる。據って、

(ア) (甲)の「率其百姓、以上尊天事鬼」の後に下文の「是以近者安其政、遠者歸其德。聞湯者、皆起而趨之、罷不肖・股肱不利者、處而願之曰、奈何乎、使湯之地及我吾、則吾(利)豈不亦猶湯之民也哉」五十五字を補ひ、

(イ) (乙)の「兼相愛、交相利」の下に、(甲)に據って「利」と「分」とを補って、「利則分」とし、

(ウ) その下に(甲)に據って「率其百姓、以上尊天事鬼」の十字を補ふ。

① 「方地」は下文には「地方」(畢沅本・牧野本)に作る。尙、「方地」の用法は孟子・荀子・韓非子には無く、管子小匡篇と莊子説劍篇とに見える。然し、小匡篇の「踰方地」に房玄齡は「謂方城之地」と注し、安井衡は齊語に本づき、「齊語作方城。楚北之阨塞也」とする。又、説劍篇の「上法圓天、下法方地」は上の圓天に對するもの。いづれも土地の廣さとは關係が無い。更に、禮記王制篇には「絕長補短、方三千里」、戰國策秦策には「今秦地形、斷長續短、方數千里」、韓非子初見秦・存韓兩篇には「今秦地折長補短、方數千里」と廣さを表はずには、皆「方〇〇里」とする。そして、墨子には、「此皆地方數百里」(非攻下)、「請裂故吳之地方五百里以封子墨子」(魯問)、「荊之地方五千里、宋之地方五百里」(公輸)とあり、「方地」に作るは非命篇の此の二箇所のみ。所で、下文の「方地」を畢沅本・牧野本は「地方」(孫詒讓云、舊本作地方)に作れば、「方地」の用例は此の箇處のみとなる。従って、此處も怒らく「地方」の顛倒であらう。

② 馬宗霍云、本文處而願之、與上文起而趨之相對、處猶聚也、願猶望。罷不肖・股肱不利者、蓋謂罷弱無似及有癘疾之人。言此輩雖不能起而趨之、亦相聚而望之也。

③「地」…「地」ならば、文王の支配する土地と云ふ事になるが、上文に「近者安其政、遠者歸其德。聞文王者、皆起而趨之、罷不肖・股肱不利者、處而願之…」と文王は飽く迄も有徳の王としてゐるから、恐らく「地」は「化」の譌字であらう。「地」と「化」は草體相似て誤り易し。

④「吾」…于省吾云、吾・敵・圍・圉古通。爾雅釋詁圍垂也。孫注圍國之四垂也。按、垂謂邊垂。奈何乎、使文王之地及我圍、言如何使文王之地及我之邊垂、則吾(利矣)豈不亦猶文王之民也哉。

非命上篇 郷者言曰、義人在上、天下必治、上帝山川鬼神必有、幹主・萬民被其大利。吾用此知之。是故古之聖王、發憲出令、設以爲賞罰以勤賢(沮暴)。①(甲)②是以入則孝慈於親戚、出則弟長於郷里、坐處有度、出入有節、男女有辨。是故使治官府、則不盜竊、守城則不崩判、君有難則死、出亡則送。此上之所賞、而百姓之所譽也。執有命者之言曰、上之所賞、命固且賞。非賢故賞也。(上土之所罰、命固且罰。不暴故罰也。③)是故入則不慈孝於親戚、出則不弟長於郷里、坐處不度、出入無節、男女無辨。是故(使)治官府、則盜竊、守城則崩判、君有難則不死、出亡則不送。此上之所罰、(而)百姓之所(非)毀也。執有命者(之)言曰、上之所罰、命固且罰。不暴故罰也。(上之所賞、命固且賞。非賢故賞也。④)①(甲)「是以入則孝慈於親戚」(上之所罰、命固且罰。不暴故罰也。③)迄と、下文の(乙)「是故入則不慈孝於親戚」(上之所賞、命固且賞。非賢故賞也。④)迄とは相對す。而して、(甲)部は上文の「義人在上、天下必治」の例、(乙)部は「不治」の例である。故に、下文(乙)の前に上文の「是故古之聖王、發憲出令、設以爲賞罰以勤賢(沮暴)」に對する一節有るべし。恐らくは脱文有らん。

②「是以」は「是故也」。下文に云ふ、「是故入則不慈孝於親戚」と。此處と相對す。「以、故也」(詞詮卷五)。

③「不」字、恐らくは「無」字の誤り。「坐處不度、出入無節、男女無辨」は上文の「坐處有度、出入有節、男女有辨」

に對す。又、尙賢中篇には「居處無節、出入無度、男女無別」と有り。「有」は「無」に對する語なれば、「不・無」は通用するも、恐らくは上文の「不慈孝」、「不弟長」に涉つて誤る。

④「是故」の下、上文に據つて「使」字を補ふ。上文云、「是故使治官府、則不盜竊、守城則不崩判、君有難則死、出亡則送」と。此處と相對す。

⑤ 上文に據つて「百姓」の上に「而」字を補ふ。上文に云ふ、「此上之所賞、而百姓之所譽也」と。又、尙同上篇には「此上之所賞、而下之所譽也」、「此上之所罰、而百姓之所毀也」と見ゆ。

⑥ 「所非毀」は上文の「所譽」に對すれば、「非」字は衍。上文に云ふ、「此上之所賞、而百姓之所譽也」と。又、尙同上篇では「此上之所賞、而下之所譽也」と「此上之所罰、而百姓之所毀也」と。

⑦ 「言曰」の上、上文に據つて「之」字を補ふ。上文に云ふ、「執有命者之言曰」と。

⑧ 「不暴故罰也」は下文の「非賢故賞也」と對し、上文の「非賢故賞也」と「不暴故罰也」とは相對す。不・非通用（經傳釋詞卷十）。

非命上篇 然則何以知「執有」命之爲暴人之道。

○ 命の上、牧野本・陶校に従ひ「執有」二字を補ふ。陶云、命上當有執有二字。上文云、而強執此者、此特凶言之所自生、而暴人之道也。此文意與相承。下文歷言桀之執有命、紂之執有命。又與此相承也。奪執有二字、則文不成義。又案下文云、故命上不利於天、中不利於鬼、下不利於人。故命亦當作故執有命。

非命上篇 昔上世^①「之」暴王、不忍其耳目之淫、心塗之辟、^②^③

①「上世」の下、上文に據って「之」字を補ふ。上文に云ふ、「昔上世之窮民、貪於飲食、惰於從事」と。此處と相並ぶ。

②「忍」…于鬻云、此忍字當訓矯。荀子儒效篇云、志忍私、然後能公。行忍性情、然後能脩。即此忍字。彼楊注云、忍謂矯其性。然則不忍其耳目之淫者、正不能矯其性也。故下篇作而不矯其耳目之欲。彼畢沅注云、而讀如能。不而矯即不能矯也。此不忍二字中間亦著一能字、則義豁。

③「涂」…于鬻云、涂蓋當讀爲涂。說文手部云、涂、臥引也。廣雅釋詁云、涂、引也。然則心涂者、心引耳。楊子法言問神篇云、涂中心之所欲、即其義矣。彼宋咸注亦云、涂、引也。

非命上篇 今用執有命者之言、則上不聽治、下不從事。上不聽治、則刑政亂、下不從事、則財用不足。上無以供粢盛酒醴、祭祀上帝鬼神、「下無以」^①降綏天下賢可之士、外無以應待諸侯之賓客、內無以食飢衣寒、將養老弱。

①「降綏天下賢可之士」の八字、舊本に従ひ「祭祀上帝鬼神」の下に移す。「上不聽治、則刑政亂」と「下不從事、則財用不足」とは相對し、「外無以應待諸侯之賓客」と「內無以食飢衣寒、將養老弱」とは相對する。又、「上無以供粢盛酒醴、祭祀上帝鬼神」と「降綏天下賢可之士」とは相對すると考へられるから、「降綏天下賢可之士」の上に「下無以」の三字を補ふ。王校は上下の文に據って、「下無以」三字を補ふと云ひ、閒詁は王校に従ふ。

②「賢可」…小柳云、「賢可は賢能なり」と。又、馬宗霍云、賢可之士、猶言賢能之士也と。

非命上篇 故「執有」^①命「者」^②、上不利於天、中不利於鬼、下不利於人。

① 陶校に云ふ、「命上當有執有一字、上文云、而強執此者、此特凶言之所自生、而暴人之道也。此文意與此相承、下文

歷言桀之執有命、紂之執有命、又與此相承也。奪執有二字、則文不成義。又案、下文云、故命上不利於天、中不利於鬼、下不利於人、故命亦當作故執有命」と。

② 牧野校に従ひ、「命」の下に「者」字を補ふ。校に云ふ、「故執有命者」と。

非命中篇 若言而無義、譬猶立朝夕於員鈞之上也。則雖有巧工、必不能得正焉。

○「能得」の二字、陶校に従ひ「得能」に改む。陶云、能得二字、當倒乙。得能能讀爲而。必不得能正、即必不得而正也。

與下文然今天下之情僞、未可得而識也、文法一律。下篇云、我以爲雖有朝夕之辯、必將終未可得而從定也。亦其證。

非命中篇 故使言有三法。

○使猶故也（古書虛字集釋卷九）。「故使」は連文。

非命中篇 今天下之士君子、（或以命爲有、）或以命爲亡。我所以知命之有與亡者、以衆人耳目之情知有與亡。有聞之有見之、謂之有、莫之聞莫之見、謂之亡。

○「今天下之士君子」の下に盧文弼は注して云ふ、「此下當有或以命爲有五字」と。吳毓江氏は盧説を採らず。上篇に「今天下之士君子、或以命爲有」とあるに據りて、「或以命爲亡」の一句のみとして、「亡疑有之誤」とする。然るに、此句は傳本は皆「或以命爲亡」に爲る。又、下文の「我所以知命之有與亡者、以衆人耳目之情知有與亡。……謂之有……謂之亡」は上文を承けて云へば、士君子の下に「或以命爲有」の五字を補ふ。

非命中篇 然胡不嘗考之百姓之情。…然(則) 胡不嘗考之諸侯之傳言流語乎。…然胡不嘗攷之聖王之事。…
○(甲)・(乙)・(丙)の三條は並列。(甲)・(丙)は「然胡不嘗云々」に作り、(乙)は「然則胡不嘗云々」に作る。孫詒讓は(甲)に注して「然與則義同、然胡不亦見尙同下篇」とするが、今は三條並列と見て「則」字を削る。

非命中篇 上變政而民易教。

○而猶則也(經傳釋詞卷七)。

非命中篇 夫曰有命云者亦不然矣。

○云者猶也者也(古書虛字集釋卷三)。

非命中篇 我非作之後世也、自昔三代有若言以傳流矣。

○「若言」…馬宗霍云、若猶此也。言自昔三代流傳、有此有命之說也。

非命中篇 意亡昔(也) 三代之暴不肖人也。

○「昔」の下、上文には「也」字有り。上文に云ふ、「昔也三代之聖善人與」と此と相對す。

非命中篇 初之列士・桀大夫、慎言知行。

○「初」…于鬯云、初猶古也。列士與桀大夫並舉、則列當讀爲烈。列士者義烈之士也。桀大夫者、俊傑之大夫也。下文

放此。

非命中篇 外之馭騁・田獵・畢弋、内〔之〕沈於酒樂、而不顧其國家百姓之政、

○「内」の下に「之」字を補ふ。此の句、上文の「外之馭騁・田獵・畢弋」と相對す（非命下篇に同文有り）。又、下文の「内之不能善事其親戚」と「外之不能善事其君長」とは相對し、共に「之」字有り。

非命中篇 雖昔也^①三代之窮民、亦由此也。^②

① 也猶者也（經傳釋詞卷四）。

② 「由」は下文には「猶」に作る。下文に云ふ、「雖昔也三代之僞民、亦猶此也」と。此と相對す。又、下篇では「雖昔也三代罷不肖之民、亦猶此也」と「昔三代僞民、亦猶此也」と相並び、此の中篇に相對す。中篇と下篇とを校すれば、「由」と「猶」とは相通ず。又、下篇の上文には「三代」の下に「之」字有るべく、下文の「昔」の上に「雖」字、下に「也」字、「三代」の下に「之」字有るべし。

非命中篇 聖王之患此也。故書之竹帛、琢之盤盂、鏤之金石、（傳遺後世子孫、）

○「金石」の下に「傳遺後世子孫」の六字を補ふ。尙賢下、兼愛下、天志中、明鬼下、非命下、貴義、魯問の各篇に類似の文有り。皆「傳遺後世子孫」の句有り。又、非命下篇には「先聖王之患之也、固在前矣。是以書之竹帛、鏤之金石、琢之盤盂、傳遺後世子孫」に作り、「先聖王之患之也」を承けて「傳遺後世子孫」と云ふ。此處は又、上に「聖王之患之也」と有れば、下に「傳遺後世子孫」の六字を補ふ。

非命中篇 此言紂之執有命也、武王以太誓非之。

○「言」字、上文は「語」に作る。上文云、「此語夏王桀之執有命也、湯與仲虺共非之」と。

非命中篇 於召公之執令於然。

亦

○「於」…于邕云、下於字即涉上於字而誤。於當作亦。孫詒讓聞詁已正。…此蓋當以執令爲周書佚篇。不當以召公爲周書佚篇也。上文云、亦言命之無也。此承之曰於召公之執令亦然、知亦言命之無矣。其義已足。何必言召公之非執命亦然乎。故知執令爲書篇名、執令爲召公所作。故謂之召公之執令。安得以召公爲篇名。召公之執令、卽猶之非樂篇言湯之官刑、下篇言禹之總德。官刑・總德篇名也。若以召公爲篇名、豈彼以湯爲篇名、禹爲篇名邪。

非命中篇 遂得光譽令問於天下。

○馬宗霍云、光譽令問、光與廣通。光譽猶廣譽也。詩周頌敬之篇毛傳云、光廣也。國語韋昭注云、光廣也。釋名釋天文云、光亦言廣也。所照廣遠也。皆光通作廣之證。孟子告子篇、令聞廣譽施於身、令聞廣譽與墨子光與令問合。聞與問古亦通也。

非命中篇 亦豈〔可〕以爲其命哉。又以爲〔其〕力也。

○「亦豈」以下は上文の「夫豈可以爲命哉。故以爲其力也」と相對すれば、「豈」の下に「可」字、下の「爲」の下に「其」字を補ふ。又、上文の上の「爲」の下に「其」字を補ふ。

非命下篇 不識^(甲)昔也三代之聖善人與、意^(乙)昔^(也)三代之暴不肖人與。

○(甲)「昔也三代之聖善人與」と(乙)の「昔三代之暴不肖人與」とは相對すれば、(乙)の「昔」の下に「也」字を補ふ。

非命下篇 雖昔也^(三)代^(之)罷不肖之民、亦猶此也。

○中篇の「雖昔也三代之窮民、亦由此也」と同意なれば、上文に據って「三代」の下に「之」字を補ふ。又、猶・由は通ず(説文通訓定聲)。

非命下篇 (雖)昔^(也)三^(代)代^(之)僞民、亦猶此也。

○中篇の略同文(中篇は僞民を窮民に作る)に據って、「昔」の上に「雖」字、下に「也」字、「三代」の下に「之」字を夫々補ふ。中篇の「雖昔也三代之窮民、亦由此也」の注參照。

非命下篇 大誓之言也、於去發^(日)、惡乎君子、天有顯德、其行甚章。

○「去發」：于鬯云、去發、亦書篇名也。太誓爲大名、去發爲小名。俞蔭甫太史平議謂(略)此說精矣。惟鬯疑去字實去字之誤。去者、倒子也。古文正倒不別。觀育字从去可見。去卽子也。去發卽子發也。後人不察去卽子字之倒。遂誤爲去字。太子發省稱子發、固無害。此儻可於俞議附備一說。下文同。

非命下篇 是故子墨子曰、今天下之(士)君子之、爲文學出言談也、

○「天下之」の下に下文に據って「土」字を補ふ。下文云、「是故子墨子言曰、今天下之士君子、中實將欲云々」と。
尙、上・中篇も「天下之士君子」に作る。又、同一篇内に於ては「土君子」と「君子」とを混用することは無い。

非命上中下終